

海外レポート

台湾中央研究院の研究環境

塩 卓悟

2012年7月より2014年3月までの1年8か月の間、筆者は、頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム「東アジア都市の歴史的形成と文化創造力」によって、台湾の中央研究院近代史研究所で研究活動に従事する機会を得ることができた。筆者の具体的な活動内容については、月度活動報告書 (<http://www.lit.osaka-cu.ac.jp/zuno/dispatch/201207-201403dispatch.shio.pdf>) をご参照いただきたい。本稿では、中央研究院近代史研究所における研究活動を通じて、中央研究院の研究環境について筆者が感じたことを、1、中央研究院内部の施設、2、中央研究院の研究活動、3、外部図書館との関係、の3つの面から紹介することにした。

1、中央研究院内部の施設

まず、筆者が訪問学人として在籍した近代史研究所から紹介しておきたい。訪問学人とは、短期間あるいは長期間にわたって中央研究院の各研究所に在籍して研究活動を行い、研究員カードや図書カードのほか、無料で研究室やさまざまな中央研究院内における便宜が貸与された諸外国の研究者のことである。近代史研究所には、常時5~10人ほどの訪問学人が在籍していた。

近代史研究所の研究室はおおむね2~4人一部屋であり、筆者の研究室も2人部屋であったが、1年間ほど筆者は同部屋の研究者がいなかったため、集中して研究に取り組むことができた。

研究所は、土・日曜日と平日の17時以降は閉められるが、研究員証さえあれば、24時間研究室の使用は可能である。中には夜遅くまで研究に従事する研究員や訪問学人もおり、筆者も通常、22~24時に帰宅し、時には徹夜することもあった。研究室内部のインターネットの状態も良好であり、3階のコンピューター室を使用することも可能であった。コンピューター室で印刷をする場合には、あらかじめ500元を支払う必要がある。上限枚数が決められているとはいえ、短期間の訪問学人の場合は、こちらを利用するほうが簡便である。ただし、筆者のように、長期間訪問学人として滞在し、大量に印刷する場合は、自身でプリンターを購入したほうがよいと

思われる。また、コピー機も、図書館で販売されているコピーカードを利用すれば24時間使用可能である。このように研究室・コピー機使用時間の自由さと、良好なインターネット環境は、筆者が研究活動を進める上で大いに役立った。

次に、中央研究院各研究所にそれぞれ併設されている図書館について述べる。筆者がもっとも利用したのが、歴史語言研究所附属傅斯年図書館と中国文哲研究所図書館の2つであり、そのほかにも近代史研究所附属郭廷以図書館、民族学研究所図書館、人文社会科学研究中心図書館、人文社会科学聯合図書館といった図書館を適宜利用した。筆者のような訪問学人は、3ヶ月、合計50冊もの本をこれらの図書館から借り出すことができるのが利点である。また、部外者である海外の研究者であっても、図書館でパスポートを提示すれば、簡単な手続きで利用できる。各図書館には、それぞれの専門分野に応じて、中国語文献のみならず、日本語、韓国語、西欧諸国語に至るまで、多言語・多分野にわたる図書や雑誌が網羅的に蒐集されて、各分野の基本的な研究書はおおむね備わっており、その総蔵書量に圧倒される。特に中国学に関する蔵書量の豊富さは、中国基本古籍庫や四庫全書などのデータベースの使用可能の状況とあわせて、中国学研究者にとって非常に恵まれた研究環境である。ただ、一つ難点を挙げるとすれば、土・日曜および平日の17時以降(ただし文哲図書館は16時45分・民族図書館は16時50分閉館)が休館という点である。短期間で中央研究院を訪れて研究活動を行う日本人研究者にとって、この点は不便である。今後、改善されることをのぞみたい。

2、中央研究院の研究活動

近代史研究所やその他の歴史語言研究所、中国文哲研究所、人文社会科学研究中心、民族学研究所といった研究所においては、毎月、研究員や海外からの訪問学人などの研究報告が実施されている。これらの研究会や学会の場合、各研究所内にてポスターによる告知があるほか、近代史研究所では、訪問学人に対しても事務室より定期的にメール連絡が入るため、筆者も、興味があるテーマや面識のある方の報告は、できるだけ参加するように努めた。筆者が参加した中央研究院開催の学会および研究会は20であるが、その内訳は、近代史研究所開催が14、歴史語言研究所が4、人文社会科学研究所が2であった。

中央研究院で実施されている学会・研究会の特色としては、以下の点が挙げられる。第一に、頻度が高いことである。近代史研究所で開催される研究会も、おおよそ月に1度のペースであるが、他の研究所でも研究会が開催され、そのほかにも学会・シンポジウムが不定期に開

催されている。中央研究院内の学会や研究会は、基本的に部外者の参加も禁止されていないため（あらかじめ登録しなければならないケースもあるが、それはレジュメや昼食などの用意のためである）、飛び入り参加は自由である。従って、各研究所の研究報告に参加すれば、一月に多くの研究報告を聴くことが可能である。

第二に、国際的な点である。長期間・短期間を問わず、中央研究院には、全世界から著名な研究者から若手研究者に至るまで、数多くの研究者たちが集まるため、中央研究院での学会・研究会では、各国の代表的な研究者による研究報告を聴くことができる。

第三に、時代・分野ともに非常に多角的な研究報告が行われる点である。筆者の研究は、食文化や典籍といった文化史が中心であり、歴史・文学・民俗などの面を複合的に含んだ学際的なものである。従って、古代から近現代に至るまでの政治・経済・社会・文化さまざまな分野に関する研究報告が行われたが、特に近代史研究所における報告は文化史に関するものが多く、時代は異なるものの、各研究テーマの斬新さやその研究視点・方法論はいずれも興味深く、学ぶべき点が多かった。

このように、中央研究院においては、国際的かつ学際的である研究報告が頻繁に行われており、世界各国の研究状況を把握できるとともに、各研究報告は専門的でありつつも、そこから幅広い視野を身につけることが可能である。さらに大切なのは、かかる学会・シンポジウム・研究会を通じて、世界各国の研究者との人的ネットワークを構築することができる点である。筆者も数名の海外の研究者と面識を得ることができた。しかし、専門的な議論を行うためには、すぐれた言語能力が必要とされる。中央研究院を訪れる欧米の研究者がいずれも中国語を巧みに駆使しているのを見るにつけ、その点を筆者は再認識させられた。また、学会や研究会で配布されるレジュメがいずれもフルペーパー（大多数は中国語、一部英語もあり）であり、中国語や英語の聴力に難のある筆者のような者でも、レジュメを読んで内容が理解できる点は有難かった。そのほかに、コメントや質疑応答が充実している点、学会でのタイムスケジュールが厳格に遵守されている点などが印象に残った。

3. 外部図書館との関係

中央研究院の各図書館では、国家図書館・国立故宮博物院図書館・台湾大学図書館のほか、台湾および海外の図書館の蔵書を検索することが可能である（<http://aslib.sinica.edu.tw/catalog/catalog1.html>）。中には貸出不可の書物もあるものの、中央研究院に各図書館の蔵書を取り寄せることも可能である。ただし、筆者の印象

でいえば、中国学の専門書（中文・日文・英文）に関しては、基本的に中央研究院の図書館で十分であり、もし足りない場合は、台湾大学図書館を利用すればよい。平日であれば、中央研究院と台湾大学との間に、研究員や訪問学人が無料で利用できる直行バスが数本でているので、それを利用すれば、約20～30分で到着することができる。

民国以前の刊本（明刊本・清刊本・民国刊本）などについては、傅斯年図書館のほか、台湾大学図書館、国家図書館や国立故宮博物院図書館をそれぞれ利用すればよい。中央研究院から国家図書館へのアクセスはバスとMRTを乗り継ぐのでいささか便が悪いが、中央研究院から国立故宮博物院へは、620路もしくは645路バスで外双溪下車（所要時間40～50分）、そこから徒歩10分程度である。時間はかかるものの、バス1本で行けるので、こちらも便利である。筆者はこれらの図書館をたびたび訪れ、『太平広記』の明清刊本の調査を実施したが、マイクロフィルムであれば、いずれもすぐに閲覧できる。また明清刊本の現物（貴重書を除く）を見る場合、申請書を提出しなければならないものの、当日閲覧可能である（ただし、国家図書館のみは、明刊本でも、審査があるため翌日以降の閲覧となる）。これらの図書館で共通していたのが、図書館員のサービスの良さである。非常に親切に対応してくれるため、利用の折には、いろいろと相談すれば、親身になって相談ののってくれるだろう。

以上、中央研究院とその他の図書館について簡単に紹介したが、それぞれの用途・目的に応じてこれらの図書館を使い分ければよいと思われる。

おわりに

今回の頭脳循環プログラムによる中央研究院への1年8か月への派遣期間は、筆者にとって、非常に恵まれた研究環境のもとで研究に没頭できるとともに、多くの研究者たちと知り合うこともできた非常に有意義な時間であった。当初は、「若手研究者派遣」と銘打っているので、筆者みたいな中年が行くのも内心忸怩たる思いがあったことも否めない。しかし、当プログラムを通じて得た経験ははかりしれない。若い研究者の方々には、こうした貴重なチャンスがあるときには、是非、一度トライしてほしい。その経験は決して無駄にはならないと筆者は考える。今後、若手研究者たちがますます積極的にこうした研究プロジェクトを利用して海外へと留学することを期待したい。

なお、今回の筆者の頭脳循環プログラムでは、実に多くの方々のお世話になった。紙幅の都合上、皆様のお名前をすべて列挙することはできないが、末尾ながら、各位に心より感謝申し上げたい。